
漆黒の姫君

叶羽 琴璃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

漆黒の姫君

【Zコード】

Z4822V

【作者名】

叶羽 琴璃

【あらすじ】

フィオナ国に最近噂に留まっている伝説が流れた。

竜を従えた「漆黒の姫君」彼女の存在は戦争を起こし、平和を乱す。だが彼女の願いは約束を果たすこと、それだけだった……。

人物紹介

セルファ・メリエット

性別：女

容姿：黒髪黒目

竜であるルイと契約した少女。「漆黒の姫君」と言われているが実際は姫君ではない。黒髪黒目は今は存在しないある一族の血を引いていると思われる。

契約の言葉やら契約の力の引き出し方やらを知っている様子をみると以前も何かと契約したことがあるのだろうか、まだ謎が多い少女である。

レイ

性別：男（雄）

容姿：黒髪金目

逸れ者の竜で常に一人で行動していたが、セルファと契約して一緒に行動するようになった。竜の中でも強い力を持ち、孤立していたのはその為と思われる。

シェーラー

性別：？

容姿：銀の鱗に金の瞳、と言われている

竜王。あまりに強大で、あまり姿を現さない。その為あまり情報が知られていません。

人間は竜王の存在を知らないため、名その物も広まっていません。

序章？

街は壊滅危機に陥っていた。傍の森にドラゴンが住み着いたのだ。国に求めた救助もことごとく失敗している。

何処かの占い師がそう言つたらしい。それを信じたのだ。

それから何年も街の娘を捧げ、とうとう私に白羽の矢が立つた。

「ドラゴンの住んでる形跡がない」

果たしてそれはいつ言った言葉だったろうか。

確かにそうだった。森の中は静けさと平穏が広がっていた。

この森の環境は最悪だつた筈だ。何故？

ドラゴンが居るから?

ウラガタニ

• • •

• • •

「人間か・・・・・」

男の声が聞こえ、はつと振り返る。そこに居たのは人間の姿をした男だった。

黒い髪に、金色の瞳。長身の細身の男。だが肌に感じるこの波動はどう考へてもドラゴンのモノだった。

「あなたが・・・・・ここに住み着いたドラゴン・・・・・？」

静かに聞くと男はふつと笑う。

「住み着いてはいない・・・・・がな。・・・・・人間にしてみれば同じ事か」

そうやつて一人で考へ込む姿は、何だかとても人間らしくて滑稽だ。そしてそれは、彼が長く人間の様に生きてきたことが判る。

「何故・・・・・・？」

知らないうちに言葉が漏れた。

「あなたは、人を理由も無しに殺さない人だと思つ。なのに何故、生贊を必要とするの？」

判らない。「ドラゴンは人を害さない」あの人は、あのドラゴンはそう言つていたのだから。彼が生贊を必要とする理由が判らない。

「お前は・・・・・」

彼はボソッと呟いた。

「お前は、普通の人間と何かが違う。・・・・・お前は何だ？」

・・・・・そんな事、こつちが聞きたい。

私は、私が何なののかが分からぬ。

でも・・・・・・

「私は人。それは何があつても私がそう思つ。ううん、思い込む。それは他人に左右される事じゃ無い」

彼の目を見て、その眼光に負けないように返した。

そして緊迫した空気が一気に消え、彼が膝を着いた。

「私は人。それは何があつても私がそう思つ。ううん、思い込む。それは他人に左右される事じゃ無い」

そう言つた少女の黒い瞳は、深い絶望を持ちながらも美しく、澄んでいた。

その奥に、深層に引き呑まれそうになつて実感する。自分が望んでいた者に出会えた事を。いや、望み以上だった。彼女の前に膝を着く。これは、従撲の証。

「私は、貴方を主と認めました。そのお心は、主次第です」「私は驚いたように目を見開いたが、理解したようにその顔には微笑が浮かんでいた。

「受け入れましょ。・・・・この契約は竜王シェールラーの名の下に、セルファ・メリエットが執り行つ。我が望むのは自由、この者を縛らず、我も縛られることはない。その契約に賛同するか」彼女が契約の仕方を知つていてる事に驚いた。が、理解する。そう、竜以外は知らないはずの竜王の名を知つていたから。つまり竜王に会つた事があるとあるという事。知つても可笑しくない。そしてその内容は彼女を表していた。‘、自由’彼女は誰も縛らず、誰にも縛られない。それが主の望みならば……

「御意に、我が主」

そしてここに伝説が生まれた

：

0・伝説の姫君

諦めてしまった人々は

倒すことは敵わない

ドラゴンの力は凄まじく

国に助けを求めたが

それに困った者達は

横暴を繰り広げたのだ

娘を生贊に捧げると

凶悪なドラゴンが住み着いて

街に危機が訪れた

望みどりうに生贊を

差し出すことを決めていた

しかし一人の麗しき

少女がそれを認めずには

漆の髪を翻し

ドラゴンの元へへと

一人立ち向かのだ

立ち向かつて行つた麗しき

一人の少女の存在は

たとえ時が過ぎようど

消える事は無いだろう

そして伝説は始まる

漆黒の姫君と竜は

来るべき刻を待ちながら

1・それ、旅を始めよう

「ここはラーザリーの街のギルド協会。

そことでも目立つてゐる二人の人物がいた。……悪い意味で。

「だからさつきから言つてるでしょ！？何で私は戦つたらいけない訳！？」

「…」いつもずっとさつきから言つています！…仕事は俺がやるからあなたは大人しくしていて下さい…！」

「私だつて戦える！…それに従僕だつたら主の言つこと聞きなさい…！」

「従僕だから言つているんです！…」に来る途中の傷もまだ完全に治つてないじゃないですか！…」

「すぐ治る！…それにそれは戦つたらいけない理由に成らないでしょ！？」

さつきから怒鳴りあいを繰り返している男と少女は周りを気にせず

に今だ繰り返していた。傍から聞いてみると互いの言いたいことが丸分かりなのだが、重要な互いは気づいていないらしい。怒鳴り合いままだ続く。

この怒鳴り合いでも十分目立つが、そうでなくともこの一人は確實に目立つだろう。

少女を心配して怒鳴っている男の姿はぱっと見て分かるくらいに整い、その金色の目は変化の者を表していた。

男一人に戦わせるのを心配して、髪を乱しながら怒っている少女も、長い髪で多少隠れているが綺麗な顔立ちをしているのが分かる。それにその黒髪と黒目が、最近広まって来た竜を従える伝説の姫君と同じである事も拍車を掛けるだろう。

「あなた一人に戦わせて、生きているか死んでいるかも分からず心配しながら待つていいと叫うのー?…………もひ、そんなの嫌なのつ

」

少女はそう言って、とうとう泣き出す。男もそれでやっと周りの視線に気づいたようだ。

「つ……分かりました……。でも前みたいな無茶はしないで下さいよ?」

溜息をついて吐き出すように言った。

「ほんと?」

「本当です。だから早く泣き止んで下さいよ、周りの視線が痛いです」

言われてキヨトンとしていた少女は周りを見渡し、白い肌を朱に染めて男の背中に隠れた。

「お騒がせしました」
やつと落ち着いたらしい彼女が服の裾を握つてきたまま周りの人々
に言う。その頃には何時もの人形の様な表情に戻つていた。：表情
だけだが

2・悪人は何処にでも居る

「…氣が付いてますか？」

レイの言葉にセルファは小さく頷いた。

「後ろから着いてくる変な人達のことでしょう。その騒ぎで目立つた…のかな？」

「恐らくは」

小さな声で話し合っていると足音が聞こえるくらいに近くなる。

「何人いるの？」

「7から10人位でしょうか。どうします？」

レイの目は特殊だ。セルファや人間と違い、夜目が利く。更に遠くまで見渡せるのだから、こういう時の不意打ちが意味を成さない。しかしその目を見れば人間でないことも一目で分かる。黄色く、瞳孔が縦に割れた瞳。それがレイの、ドラゴンの特徴だ。

「それ位ならちやつちやと片付けちゃって。もう眠い、限界」

セルファはそう言うとそこらに転がっていた木の箱に座り込む。口調からすると手伝う気は無いらしい、レイは表情だけで苦笑した。

「では、行つて参ります」

そう声を掛けて、彼女を守るように後ろを向く。その背中に言葉が掛けられた。

「氣を付けて……私の騎士の、御武運を願います……」

自然にレイの口元が緩む。

「ああやつていつもいきなり何かを言い出すが、我が主は優しく、礼儀正しいのだ……」

「御意に」

レイは唇くちづけで答えて、敵に田を向けた。

「出て来て下れー、もう気づいている事ぐらい分かっているでしょう？」

レイの静かな声がその場に良く響く。そしてその声に応えるかのようにバラバラと統一感の全く無い数人の男達が一人を囲むように立ち塞がつた。

「やれやれ、その様子から行くと臨時で集めた人数の様ですね、一体何の用でしょう？」

まるで惚けた様に無害な顔をしてレイは質問を投げかけた。と言つても分かっているのだが、そこは空氣を読むべき所だらう。

と、小さく少女の笑い声が聞こえて顔を顰めた。

「ふふっ…やっぱりレイ、あんた最高よ……ククッ…」

壺に入つたらしくセルファの肩が小刻みに震えている。

「それはそれは良う御座いましたねー」

段々とやる気が無くなってきた。めんどくさくなつたとも言つ。

「質問しといて無視してんじゃねえよーー！」

そんな濁声が聞こえた気がして振り向くと頭から髪の毛が絶滅して残念な格好をしているゴツイ男が「失礼な言葉を並べてんじやねえ！！」「すみません、声に出していました？」

今度は押し殺したものではなく、華やかに楽しそうな笑い声がした。男が段々苛ついて来る。多分「こんなヤツ等相手にしたくなえ」的な事を考えているのだろう。いつも同じ事を思つてゐる、筈である。つていうか……

「めんどくさいんだよなあ……」

周りに居た全員が反応した。その間にセルファに近づく。

「お嬢様、少々手荒に行きます」

「ん」

いわゆるお姫様抱っこでセルファを抱き、飛んだ。
「逃げるが勝ちなんで逃げさせて頂きます、帰りはお気を付けて下さい」

そしてそのまま男達の前から消えた。

「…………ねえ、レイ

セルファが呟く様に言つて話しかけてきた。

「はい、何でしうっ？」

空の中、あまり喋ると下を咬むものだが、慣れているのだろうか。

「羽……」

「は？」

「羽、触らしなさい」

「えつと……降りてから、して下やー」

「うそつ

……平氣な様だ。

3・悪人の逆襲(?)（前書き）

少し暗いです。

セルフアの過去が早くも垣間見える…といいな。
つて言う内容です。

3・悪人の逆襲(?)

「そろそろ起きましたかお嬢様？」

聞きなれない濁声で目が覚めた。目覚めが悪い。

毎朝レイの声で起きてるからか何か苛つく。

「そここの濁声、黙ってくれる？耳障り」

寝返りを打ち、セルファは男に不機嫌そうな声で返した。そのまま再び夢の世界へ舞い戻る。

「つて、無視して寝てんじやねえよ小娘！！」

「つるさいなあ、目が覚めちゃつたじゃない」

「この状況で寝る奴が居るか！？絶望して泣き叫べよーーー。」

逆に絶望してしまいそうな男の叫び。

攫つた相手に暴力以外で後悔させる少女の姿が口にはあった。

……というかセルファ自身だった。

「しようがないなあ」

セルファは起き上がって、近くの机に座る。

「眠気覚ましにしようも無い話に付き合つてあげる。で、何で私を攫つたの？」

醜悪な顔を復活させて、男はその問いかに答えた。

「いやなに、さつきのにーちゃんにお頭が怒つてなあ、おはなし
しをしたいんだつてよお」

そしてその保険の為に攫つたと。男はお世辞にも良い顔とは言えない顔で笑う。

「…ふーん、そういう口上」

セルファは納得したように続けた。

「そう言えばあつたなあ、前にもこんな事

四年前だつたかしら、と。

「知つてゐる？ 盗賊団が潰されちゃつた事件。

あれつてその盗賊が奴隸狩りに人を拉致つた時のことなのよ？」

赤い花の事件。

皆殺しにされた盗賊団のアジトに描かれた赤い花。死んだ盗賊達の血だつたと言つう。

「その犯人は今だ不明なんだつて、怖いわよね」

言葉とは裏腹に笑うセルファ、少女に男は恐怖を覚えた。

「私、盗賊に奴隸として狩られた一人でね。

お友達が助けてくれたけどその時その子が怪我しちゃつて……ムカついたから殺したの」

「お前が……？」

正直、信じられる話じやない。

華奢な体付きの、まだ幼いであろう少女があの惨状を巻き起こしたとは。

それでも何かが納得させた。

「……レイとは会つ前の事よ。だから彼は知らない」

セルファはまるで姫君のように、優雅に笑う。

この清廉された所作が、“漆黒の姫君”の由来だった。

「ごめんなさい、知られる訳にはいかないのよ」

漆黒の瞳。セルファの目の色が別の何かと重なつた。

色だつた。

……………それが男の、最後に見た景

3・悪人の逆襲（？）（後書き）

次話で『ラーゼリーに咲く花』完結です。
恐らく。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4822v/>

漆黒の姫君

2012年1月8日21時54分発行